
イノセンス

真衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イノセンス

【Nコード】

N1802A

【作者名】

真衣

【あらすじ】

バカップルです。

「なあ、波音。」

「うん？」

「波音の一番大切なものって何？」

「イノセンス（キツパリ）」

「（ガーン）そ、そうなんだ。。。」「

イノセンス

「はあ~~~~。。。」

ラビは食堂にいた。

「なんだ。その重苦しい溜息は（呆）」

ラビの前で食事を取っていた神田は呆れて一旦箸を置いた。

「聞いてくれるか？」

「お前が話す気ならな。」

聞くしかないだろう。

「実は……」

ラビは波音と話していた事を話し、話し終わった後に再び重い溜息を吐いた。

「……なるほどな。」

「なあ。オレって波音に嫌われてるのかなあ。。。」「

「誰もそんな事は言っていないだろう。」

「~~~~~ッ!~!でもさあ・・・」

「そう思っで辛い思いをするのはお前だぞ。ちゃんと波音に聞いてみる。」

真面目にラビの相談に答える神田。

「・・・嫌いだって言われたらイヤなんだ。」

「嫌いだと言われたら、何処を治せば好いてくれるか聞けば良い。」

「恐いんだ。波音の口からそんな事言われるのが・・・」

「安心しろ。アイツは、そんな事言う様なヤツじゃない。」

「・・・それはお前が一番知ってるんじゃないのか?」

「・・・。。分かった、オレ聞いてみる!!」

「その意気だ。」

そついうと神田は再び箸を持ち直し食事を始めた。

「波音~~~~!!」

ラビは息を切らして波音の方に走ってきた。

「ああ、ラビ。どしたの？」

「あのさ。波音…………オレって波音に好かれるにはどうすれば良い？」

顔を少し赤めながらラビは聞いた。

「は？」

何言ってるのこの人は……心当たりが無いんですけど……

「だからあ……」

「ちょ、ちょっと待って。いつ私が嫌いって言ったよ？」

「さっき（キツパリ）」

「言ってるから（断言）」

「え、言ってたじゃん。オレよりイノセンスが大事だって。」

「いつ、ラビとイノセンスを比較したのよ。」

「へ」

「だ……だってさっき聞いたら……」

「ラビは『私の一番大切なものって何？』って聞いたじゃない。アレって人物もOKって言ってなかったじゃない。」

「そういえば……（汗
じゃ、じゃあ、人物OKだったら？」

「もち。ラビっしょ。」

「~~~~~!!良かったぁ・・・v v」

ラビはその場にヘタリこんでアハハと笑っていた。

「なに?もしかして、ずっとそれで落ち込んだの?」

「うっ!!そ、それはあ~~~~:;」

「はぁ。さっき、ユウが心配して私に言ってきたよ?」

「ええ!?さっき相談したのに・・・あ。」

「・・・バカ?」

「は、反論できない・・・(泣」

「ま、悩みの種が減ったから良かったじゃない♪
・・・私が悪いんだけどさ。」

波音は肩を竦めた。

「そんな事無いって。オレが勘違いしただけだし。」

波音が気にする事無いって!!」

「そ?そう言ってもらえると助かるよvv」

二人はその後他愛の無い会話をした。
それを見た神田は・・・

「・・・アイツらは時と場所を選ぶ事を知らないのか?・・・
バカップル。」
呆れて物も言えん。

そう言ってその場から去っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1802a/>

イノセンス

2011年1月26日03時52分発行